書評

岡部善平著
『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程
—「総合学科」のエスノグラフィー—』

服　部　次　郎※

1．はじめに

本書は，著者が2002年に博士の学位を取得した際に提出した論文に加筆修正して刊行されたものである。評者は，本書の主な研究フィールドとなった筑波大学附属坂戸高等学校（本書ではＳ高校と表記される。本稿では以下筑坂と略記する）において，2005年度末に退職するまで，総合学科創設の先行事例となった筑坂の学校改革のリーダー役を務めた。この間，学校現場の実践者としての報告や論文を発表してきたが，インサイダーの思考はどうしても現実追認にならざるを得ない。評者が著者の研究フィールドとしての筑坂における便宜を提供し支援したのは，アウトサイダーとしての冷徹な思考で実践者の軌跡を論理化してほしかったからである。その意味で，本書の刊行はまことに嬉しい思いである。

高校「総合学科」は，1994年度に筑坂を含む全国７校で始まり，14年目になる本年度には全国に300校を超えている。従来の普通科及び専門学科とは違った第三の学科として設置された総合学科は，「個性化・多様化」を目指す高校教育改革のシンボル的役割を与えられ，前二者の閉塞感を打破する突破口として選択制・単位制による柔軟なカリキュラム運営を学校システムの根幹に据えた。卒業までに取得すべき単位の半分程度を選択科目で履修させるという大幅な選択制カリキュラムの導入であり，入学時には一切の枠組みをせずに，１年次での原則履修科目「産業社会と人間」において将来の生き方あり方や職業選択の指導を行い，その上で自己の進路や将来展望に応じた２・３年次の履修科目を選択させる。すなわち，十分に学習への動機づけを行った後に，主体的な科目選択をさせ，選択した上は自己責任で学習に取り組ませるということが総合学科教育の指導論理であ

※東京女子体育大学

った。著者は，筑坂という学校現場を参観・観察しながら，総合学科教育の根幹をなす指導論理に疑問を呈する。まさにインサイダーからは発想できないアウトサイダーならではの冷徹な観察眼によって本研究は始められる。

2．本書の内容の概要

第Ⅰ部　高校教育カリキュラムにおける生徒の選択と適応の問題

著者は「問題の設定」を次のように述べている。高校教育における近年のカリキュラム改革は「選択制の拡大」を基調としている。中で，総合学科に典型化される現代の選択制は，「個性重視の理念」と「自己責任の原則」を特徴としている。個性に応じた選択の自由を生徒に与えるが，結果に対しては生徒が自己責任を負わねばならないということである。この考え方には，生徒は選択する以前から科目やコースへのなんらかの興味・関心を持っているという前提がある。だから選択の結果は「個性の現れ」であり「自己責任」であるということになる。ところで，著者は，その前提に疑問を呈する。はたして生徒は，選択する以前から何らかの関心や学習要求を保持しているのであろうか。あったとしても新しい学習に対する好奇心という程度の漠然としたものであって，むしろ学校の提示する選択状況において科目選択を行う過程で初めて具体的な形を取るのではないだろうか。だとしたら選択肢を設定する学校側に大きな「教育責任」があるのではないだろうか。そこで，著者は生徒の科目選択の過程を選択制カリキュラムへの適応過程として捉え直そうとする。生徒の科目選択の過程を行為論の視点から時系列的観察によって詳細に分析し，生徒が選択制カリキュラムに対していかなる適応を試みているか，またこの適応過程は，選択制カリキュラムのいかなる作用によって生起したものなのか，という点について明らかにしようとする。

「方法論及び分析枠組」で，生徒の選択行為の隠れた意味を，生徒の日常的な様々な行為，言動の中から柔軟に感受するために，エスノグラフィーの手法を用いるという。具体的には著者は初めは大学院生としてそのあとは非常勤講師として３年間筑坂に通って，空き時間や休み時間を利用して参与観察や生徒への聞き取り調査・質問紙調査を実施して収集された厖大なデータを分析し考察したことをいう。フィールドワークで得られたデータを分析して仮説を生成する際に分析の枠組みとしてパースペクティブという概念を用いた。生徒たちが選択の岐路に立って，その選択状況に対処するために作り上げる主観的なものの見方あるいは

考え方を著者は「パースペクティブ」と呼び，このパースペクティブの構成過程という側面から，生徒の科目選択の過程を時系列的に分析したのである。

第Ⅱ部　実証的検討

この部が300頁に及ぶ本書の約３分の１を占める核心部分であるが，Ｓ高校（筑坂）でのフィールドワークに基づくエスノグラフィーが時系列的に語られることになる。まずＳ高校の１年次生は入学間もない段階で，系列を自らが従うべき揺るぎない枠組みとして自明視するパースペクティブを構成する。続いてＳ高校独特の「産業社会と人間」を検討する。これにも系列に生徒の所属意識を形成させるような教師集団の思惑が作用している。夏休み明けに科目選択が行われるが，この時点での生徒のパースペクティブは①系列の存在の自明視②大学への推薦入学という進路展望③普通科目に対する専門科目の優位という３点に特徴づけられる。そして，１年次の生徒集団は「系列に基づくパースペクティブ」を構成することによって，本来系列に拘束された限定的な選択状況を肯定的に受け止め，自ら進んでその選択状況へと適応していく。すなわち，１年次生の科目選択過程は，とりもなおさず教師集団の系列による統制作用への適応過程を意味しているという。

次章では２・３年次生に焦点を当てる。２年次生が直面する問題は，選択した科目内容が予想とはずれることである。２年次の夏休み明けに科目変更の機会が与えられるが，このときの科目変更行動は，一般入試による大学進学あるいは系列の教育内容と対応しない独自の進路を志向する「系列に非同調的なパースペクティブ」と，推薦入試による大学進学あるいは普通科目の回避を志向する「系列に同調的なパースペクティブ」になる。すなわち，系列外科目を増やしていく非同調的な変更と，系列科目をより増やしていく同調的な変更とである。

３年次生になって，生徒たちは具体的な進路を決定しなければならない。学校は年間を通じた進路指導プログラムによって生徒に進路決定を迫っていく。２年次の科目変更時には分化した生徒集団のパースペクティブも，進路決定時には，再び系列に準拠したものに収斂していく。すなわち，「系列に同調的」だった生徒集団は本来希薄な進路意識を系列の枠組みに適合させていく形で，「系列に非同調的」だった生徒集団は学力不足・情報不足を系列の専門科目によって補足していく形で，それぞれ系列に準拠した進路展望を構成していく。

以上の調査結果から著者が要約することは，一つは生徒の科目選択，科目変更，進路選択といった一連の選択行為が，生徒個々人の持つ固定的な性向にのみ根ざ

すものではなく，学年の上昇や学習内容の専門分化など，学校内の地位の移動に伴って常に再構成される，即ち「動き続けるパースペクティブ」に基づくものであるということである。二つめには，系列というカリキュラム上の知識枠の実施および内容の在り様によって，生徒集団のパースペクティブの構成過程が規定されてくるということである。総合学科では本来系列は生徒の所属を表すものではなく，科目選択上はなんら統制力を持っていない。にもかかわらず，教師集団は系列の系統性に則った科目選択を行うように働きかけ，生徒集団も，苦手な普通科目を避けたり，進路に有利と思われる科目選択をするために系列を選択行為の準拠枠として利用するので，系列というカリキュラム上の知識枠が持つ顕在的，潜在的な統制作用が生徒の科目選択を大きく規定することになる。

第Ⅲ部　理論的考察

S高校という具体的かつ限定的な状況におけるエスノグラフィックな調査によって得られた知見を基にわが国高校教育における選択制カリキュラムの理論を構築しようとするのがこの部の目的である。ここでは，シュッツの「レリヴァンス」という概念が用いられる。レリヴァンスとは，ある個人が，ある状況で，ある対象を選定し，それに対して関与するときに則る，社会的に獲得された認知上の原則あるいはルールを意味しているという。これによって生徒集団の適応行動の諸特徴を検討すると，生徒集団は，科目を選択し，変更し，自らの学習活動を方向付けていく際，まず選択科目群を社会的に是認されうる特定の類型の下に認識しようとする，さらに，その類型に準拠する形で自らの進路を展望したり，短期的な興味の充足を図ったりする。そうすることで，生徒集団は，選択制カリキュラムを自らにとって意味あるものに解釈し直そうとする。即ち，「類型化」と「時間的展望」という二つが適応行動の特徴である。次に選択制カリキュラムを編成する教師集団のレリヴァンスを検討する。比較として米国ハイスクールの選択制カリキュラムが用いられる。これによれば，わが国の選択制カリキュラムの特徴は「枠を設ける志向性」と「進路による枠の正当化」という二つである。生徒集団にとって有意なカリキュラムは何かを考える教師集団は，「系統性をもったよい選択」をさせるために「枠」の存在は自明のこととし，さらに「枠」は生徒の進路を先取りし，進路選択の指針となるべく設定するのである。ところで問題は，生徒の立場から見たとき，そのカリキュラムが必ずしも教師集団と同様に有意なものとして受け止められるとは限らない。そのとき，「枠を設ける志向性」は生徒の

個人誌を反映した独自の類型化を困難にすること，「進路による枠の正当化」は生徒にとって枠と結びついた進路以外の進路は実現困難なもの，リアリティの低いものと考えさせることになる。よって，わが国の選択制カリキュラムの特質は，生徒集団から見れば特定の解釈の仕方を賦課してくる作用，強制してくる作用をもった「進路展望を賦課するカリキュラム」だという。そして，生徒集団が個人誌において培ってきた類型化と時間的展望という認知の仕方と照らし合わせたとき，はたして既存の知識枠が生徒の進路展望の構成を促進する上で妥当なものかを検討するべきと著者は考える。

従来のカリキュラム研究では選択制カリキュラムは，それが生徒集団の進路分化に果たす機能という観点から取り上げられることが多かった。この機能論的アプローチに対して，著者は本研究の成果に基づいて行為論的アプローチを提案する。従来の諸研究が前提としてきたカリキュラム上の知識枠と社会の分業体制との対応関係を一旦留保して，即ち，生徒は進路を見越した合理的選択をするのではなく，むしろその場その場の選択状況からの脱却を繰り返しているうちにいつの間にか関心や進路展望を構成していくものと考える。機能論的アプローチは，カリキュラム上の知識枠と分業体制との対応関係が安定した社会においては，比較的容易に行える。しかし，産業構造が急速に多様化し，また大学への推薦入試枠が拡大した今日，多くの生徒にとってはこの種の対応関係はさほど明瞭なものではない。そのため対応関係を学習する過程は長期にわたり，しかもその結果得られる解釈は流動的なものとならざるを得ない。機能論的アプローチが軽視してきた側面に着目することで，選択制カリキュラムに関する独自の理論的視点を切り拓こうとする。

第Ⅳ部　結論

本研究がカリキュラム研究という学問領域にいかなる成果をもたらしたか。一つは特定の事例校における特定の学年の生徒集団を主たる調査対象として取り上げ，その生徒集団の入学から卒業までの３年間におけるカリキュラム経験について，パースペクティブの変容過程という一貫した理論的視点から検討して，カリキュラムの効果を実証的に把握する方法として有効であることを明らかにしたこと。二つめは生徒集団のカリキュラム経験がカリキュラムを介して形成される教師集団および他の仲間集団との日常的な関係性に規定されることを解明していく上で，調査者が被調査者の日常的な生活世界に入り込み，そこでの出来事を観察

し，記述していくエスノグラフィーの手法の有効性と留意点を明らかにしたことである。

最後に実践的研究への示唆を述べる。一つはカリキュラム・ガイダンスの再検討である。現在行われているのは，進路展望を構成して科目選択をさせる，即ち将来から現在を考える「逆算」方式のガイダンスである。本研究で明らかにした「動き続けるパースペクティブ」の観点からすれば，現在の関心や学習の在り様から進路を模索していくスタイル，即ち現在から将来を志向していく「加算」方式のガイダンスが必要である。二つめは「生徒による選択」という意味そのものを再検討することである。教師集団が既存の知識枠の維持に固執する限り，いくら選択科目数を増やしても各知識枠内における科目が細分化されるだけで，生徒の選択幅が広がるわけではない。結果，総合学科といえども従来の知識枠に囚われている限り普通科のコース制や専門学科となんら変わることはない。既存の知識枠とは対応しなくても，生徒の個人誌において培ってきた類型化に基づいて，生徒がその学習経験の中で構成した生徒独自の知識類型に基づいて科目選択できることが必要である。著者の意図は，生徒自身にとっての「学ぶ意味」の重要性を，カリキュラムの実践的研究において復権させることにあると結んでいる。

3．書評に代えて感想

以上通読して，書評せねばならないのだが，カリキュラム論という学問領域の研究者ではない評者には本書を学問的視点から論評することは難しい。初の総合学科創設に学校現場で携わった実践者としての感想を述べて書評に代えさせていただく。

読み終えて，大きな感動を覚えている。先行研究の少ない総合学科の研究に大きな第一歩を記した筆者の業績に心から敬意を表したい。現場の実践者は既存の建前を信じて前に突き進むしかない。なんとなくおかしいなと感じることがあっても，深く分析し論理化することができない。そんな実践者の軌跡を明晰に論理化してくれたことに感謝したい。総合学科に携わるすべての関係者にぜひ一読を勧めたい。

振り返ってみれば，総合学科創設時に筑坂の教師の大部分が危惧した点は，生徒に自由に科目選択させたら，系統性のない学習になって学力がつかない，進路も実現できないということであった。そこで，いかにして進路目標を確立し，系統性のある科目選択をさせるかが「産業社会と人間」の目標となった。進路を目標とした系統性ある科目選択をするように生徒を統制したことは教師集団の意図

したことであったが，しかし，教師集団が提示する進路目標そのものが多様化する生徒の学習ニーズとは齟齬のあるものだということは感じていた。そもそも筑坂の初期の系列設定およびカリキュラムは従来の専門学科体制から抜け出せない教員集団の後ろ向きな意識の産物だったから，「生徒の個人誌に基づく生徒独自の知識類型からなされる科目選択」にはなり得なかった。しかし，現実の学校改革は更地に家を建てるのではなく，旧来の枠組みを少しずつ壊しながら新しい枠を築いていくもので，実践者にとって内包された矛盾は覚悟の上であった。本書の第Ⅱ部を読みながら，筆者の細密なエスノグラフィーに感動すると共に，当時の矛盾に満ちた学校状況を複雑な感慨で思い出す。教育学的研究手法で当時の筑坂を分析するとこういうことになるのかと感心しきりに読み進んだ。

本研究のフィールドワークが行われた期間から５年ほど経った2003年度より筑坂は第２次学校改革として系列およびカリキュラムの改革を行った。本書の結論における著者の提言に反して，より「枠の統制」を強める系列選択制の導入であったが，この改革を構想した評者の意識には本研究が明らかにした「生徒の将来展望は初めから在るのではなく，選択した科目の学習を通じて構成される」ということに強く影響されていた。実践者としてはだからこそより明確な将来展望を系列によって示さねばならないと考えた。本書の研究フィールドだった頃とは大きく変わった現在の筑坂に対する著者の考察を聞きたいところである。

エスノグラフィーという研究手法の必然で，第Ⅱ部では筑坂の生徒の科目選択行動が詳細に語られる。そのことは同時に生徒の選択対象である筑坂のカリキュラム，そこには個々の科目の内容と担当者である特定の教師の姿までが想像され，いわば筑坂という高等学校の核心的内部が赤裸々に描かれることになる。むろん筑坂としては，そのことを承知の上で著者のフィールドワークを許可したのであり，なんら問題ではないが，しかし，このような手法での研究は，大学に研究フィールドを提供することが使命の一つである附属学校ならばこそ成り立つことである。本書を成功例として，今後も大学と附属学校との研究連携がより発展することを祈念して稿を閉じる。

岡部善平著『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程
—「総合学科」のエスノグラフィー—』
風間書房，2005，11,000円